後　記

松本三郎教授は昭和三六年に慶應義塾大学法学部副手として塾に就職されてから、三〇年以上にわたり、一貫して塾ならびに法学部の研究・教育の発展のために御尽力された。とくに、昭和五六年から一二年間にわたる慶應義塾常任理事としての日夜の御努力と華々しい実績に関しては、筆舌に尽くしがたいところがある。松本先生の御活躍は、いうまでもなく塾内にとどまるものではない。日本学術会議、アジア政経学会（元理事長）、日本国際政治学会（元理事長）などを通しての学術活動、また大学設置審や私大連盟などの学外行政においても多大の御貢献を果たされた。

松本先生はわが国を代表する第一級の東南アジア研究者である。国際関係の現実は、来たるべき世紀が「アジアの時代」であることを如実に証明しはじめている。松本先生は、一貫して日本にとってのアジアの重要性を説き、またアジアに関心を抱く数多くの学生を養成し、そして数多くの優れたアジア研究者を輩出してこられた。私自身も大学院時代以来、松本先生から実に多くのことを学ばせていただいた。アジア研究には強靭性と寛容性のバランス感覚が必要なこと、先生からはとくにこのことを強く教えられたように思う。松本先生一流のバランス感覚は、先生のお人柄そのものであったようにも思われる。先生が塾から去られても、その精神は塾のアジア研究に永く受け継がれるにちがいない。

松本先生はすでに平成五年九月末日を以って慶應義塾大学法学部を御退職されており、その後は法学部客員教授として学部と大学院の授業科目を担当されてきた。周知のように、早めに御退職されたのは、平成五年一〇月一日より防衛大学校長の要職に御就任されたからである。冷戦崩壊以後、アジア地域の安全保障が不透明となりつつあるなかで、松本先生の知性とバランス感覚が強く求められたということであろう。

松本三郎教授の定年退職にあたり、ささやかな感謝のしるしとして、われわれは本誌第一一号を退職記念論文集として先生に献呈する次第である。本号には、法学部同僚、後輩、ならびに松本先生の薫陶を受けた門下生の、それぞれの分野での力作が掲載されている。短時間での編集作業の関係で、残念ながら掲載に間に合わなかった論文もいくつかある。これらについては、いずれ本誌または他誌で掲載されることになるであろう。

最後に、今後も三田の山でしばしば松本三郎先生の温かい眼差しに触れることができることを期待しながら、そして、先生のますますの御健勝と御活躍を衷心より祈念して、編集後記のむすびとしたい。

平成七年一一月

法学部教授　国分良成